第Ⅱ部　ねぶた・ねぷた祭り実施校の訪問調査

第1章　青森市立古川小学校　「ねぶた大好き！活動」

１．学校の概要

古川小学校は、青森市古川地区にある小学校である。青森駅からも近いが、学校周辺は住宅地となっており、比較的静かな環境である。学級数は７（特別支援学級含む）で、全校児童数は171名（平成２３年５月１日現在)。各学年１クラスずつとそれほど大きな学校ではない。
古川小学校の大きな特徴は、学校に「古川市民センター」が隣接しているということである。小学校と市民センターとは各階でつながっており、休日には、体育館や視聴覚室が開放され、市民センターの一部としても利用されている。
開かれた学校という印象が強く、授業時間にも地域の方が校庭を横切ることもあるような、地域と密接に関わりあっている学校である。

２．ねぶた大好き活動の歴史

古川小学校では、「総合的な学習の時間」が導入されてから、全校児童で地域を練り歩くパレードが行われていた。その中で、ねぶたを取り入れたパレードを行ったところ、地域の方々の反応が良く、地域ねぶたとして発展させたことが始まりである。

平成１６年：「ねぶた大好き！」という名称で、「総合的な学習の時間」での活動がスタートする。古川地域ねぶた(古川小学校を中心としたもの)が行われる。

平成２２年：運行の安全確保のため、運行コースの変更を行う。一心會のメンバーが中心となり、囃子の夜間練習が行われる。

３．活動領域と内容

〇領域

毎週火曜日の６時間目が「総合的な学習の時間」として設定されており、７月末の地域ねぶた当日まで、この時間を使って「ねぶた大好き！」活動が行われている。よって、「ねぶた大好き！」活動を行うのは、３～６年生の児童ということになる。１、２年生は当日のみ参加し、ハネトとなる。

〇内容

児童は自らが希望した「金魚ねぶた」「鉦」「笛」「太鼓」「ねぶた」の班に分かれ活動を行う。そのため班には３年生から６年生まですべての学年の児童がいる。(「金魚ねぶた」の制作は、ミニねぶた制作の練習として行われるため、３、４年生が中心であり、「ねぶた」の班は５、６年生が中心である。)

教員もまた希望の班につき、指導を担当したり、児童とともに囃子を習ったりする。教員においては、活動への関わり方は様々である。囃子については、一心會のメンバーが主に指導を担当する。

〈金魚ねぶた制作班〉

指導：講師、古川小学校の教員

活動場所：家庭科室

内容：ミニねぶた制作の練習というのが、大きな目的である。そのため、この班に参加するのは、基本的には３、４年生となる。４月の班分け後から活動が開始され、活動時間の中で、金魚ねぶたを完成させる。児童は、紙貼り、墨書き、ロウ書き、色付けと様々な工程を体験することができる。中でも、紙貼りは、次年度のミニねぶた制作の際に必要になる技術であるので、重点的に練習をする。用具は講師や教員が用意しており、毎年使うものであるため、学校の備品として管理されていることも考えられる。作った金魚ねぶたは、運行時に持って歩く。

〈ねぶた制作班〉

指導：講師、古川小学校の教員

活動場所：昇降口付近のオープンスペース

内容：５、６年生を中心に、骨組みに紙貼りをすることが、この班の仕事である。古川小学校卒業生でねぶた弟子の立田健太氏が毎年度新たな骨組みを寄贈している。児童はその骨組みに紙貼りを行っていく。指導を担当する教員は主に助言をし、児童の力ですべての紙貼りを行えるようにしている。しかし、児童の活動だけでは時間が足りない場合は、保護者の方々に手伝っていただくこともある。保護者を教員が指導するのではなく、学年を越えて保護者をペアにし、経験のある保護者が初心者の保護者に紙貼りを教えるという形をとっているため、保護者同士の交流も見られる。

平成２２年度は、東北新幹線の八戸～新青森間開通を受けて、新幹線型のねぶたも制作し紙貼りを行った。新幹線型ねぶたには、児童が自画像を書き入れており、完成したときの児童の顔は誇らしげだった。児童が担当するのは紙貼りだけであり、色付けは基本的に立田健太氏が行っている。

〈鉦班〉

指導：一心會、古川小学校の教員

活動場所：音楽室

内容：一心會のメンバーが中心となり、指導を行っている。鉦は児童が購入したもの、もしくは譲ってもらったものであり、基本的には個人の持ち物である（後述する笛も同様）。青森ねぶたのナナフシを練習している。班分け後は初心者だった児童も、約３ヶ月間の練習を経て、囃子の演奏を行えるようになっていく。指導の中心は一心會の方ではあるが、中には、囃子方に所属している児童もいるため、全体演奏の際などは班員を統括し引っぱっていく姿も見られる。

〈笛班〉

指導：一心會、古川小学校の教員

活動場所：視聴覚室

内容：基本的な内容は、鉦班と同様である。しかし、笛は音を出すまでが難しく、コツをつかめず苦労している児童も多く、指導も困難である。それでも毎年度笛班で練習を積んだ児童は、学年が上がるごとに上達していくという姿も見られる。経験の無い教員にとって、笛の指

導はとても難しいものであるため、主な指導は一心會に任せていると言える。班の中でも学年等でグループ分けをするなど、指導の方法も工夫がされている。運行の近づく７月には、“テスト”という時間も設けられており、合格シール獲得のため、児童は一生懸命に活動に取り組んでいる。

〈太鼓〉
　指導：一心會、古川小学校の教員
　活動場所：体育館
　内容：同じ囃子の練習ではあるが、鉦班・笛班とは少し活動のしかたが異なっている。古川小学校にある太鼓は２台であり、限られた時間の中ですべての児童が太鼓をたたけるようにするための工夫がされているからである。太鼓の順番を待っている児童は、体育館の床に広げたダンボールを太鼓代わりに練習を行う。時には、教員の太鼓に合わせて、全員で床のダンボールでの練習も行っている。全体練習の際は、太鼓班が中心となりながら、たたき手の受け渡し方、安全な近づき方なども指導する。

※囃子の夜間練習について
　平成２２年度から､一心會メンバーを中心に古川小学校を開放した夜間練習が行われている。先述したとおり、古川小学校は市民センターと隣接しているため、市民センターを経由した利用となっているようだ。練習会には囃子を担当する鉦班、笛班、太鼓班の児童も多く参加している。参加には一心會メンバーではない保護者も付き添うなど、地域をあげての取り組みだということがうかがえる風景となっている。

※火曜６校時の学校開放
　火曜６校時は「総合的な学習の時間」で「ねぶた大好き！」の活動日であるが、この日は地域の人々、そして一心會のメンバーが簡単に出入りできるようになっている。昨今、不審者問題などから、学校への立ち入りは厳しく制限される場合が多いが、本当に簡単に地域の人々が出入りしている風景がそこにある。各班にも、時間のある保護者（一心會メンバーでない）が参加している姿も見られる。練習後には保護者間で話が尽きない様子も見られ、重要な交流の場となっているようだった。

４．古川小地域ねぶた当日について
　「ねぶた大好き！」活動の集大成となるのが、７月の一学期終業式前の土曜日に行われる「古川小地域ねぶた」の開催である。この行事は、学校行事の一環とはなっているが、地域色の強い行事であり、地域住民からの関心も高い。

〇当日の様子
〈当日の流れ〉
①集合　→　学年ごとに整列
②記念撮影
③隊列編成
④運行開始→（学校で休憩）→　運行

⑤運行終了　→　片付け

〈具体的な内容や風景〉

①集合　→　学年ごとに整列

当日の集合場所は、古川小学校の校庭である。児童は半被を羽織ったり、体操服にはちまき姿であったり、思い思いの姿で運行に参加する。児童はみな、首から水分補給用の水筒やペットボトルを提げている。

児童は集まると、教員の指示で学年ごとに整列する。そこで、担当の先生のお話、校長先生のお話、ＰＴＡ会長のお話などの開会式とも呼べるものが開催される。

整列して話を聞く児童達

運行を前に･･･

②記念撮影

開会式の終わった後は、ミニねぶたを前に記念撮影が行われる。毎年度３台のミニねぶた（今年度・昨年度、一昨年度のもの）で運行するため、一台につき２学年が記念撮影する。保護者や先生方も撮影に参加する。

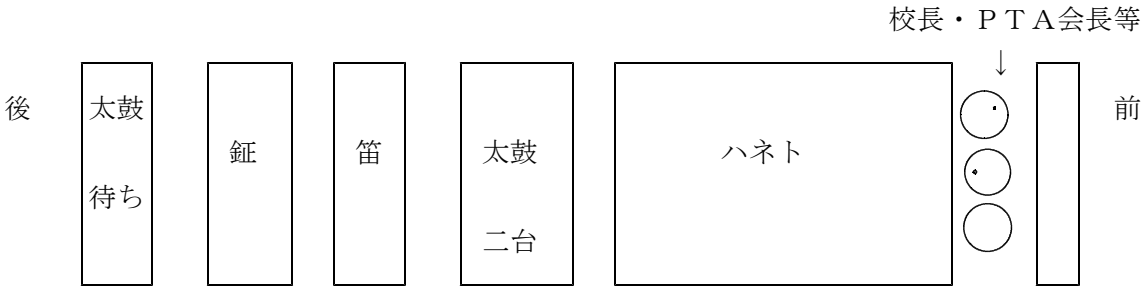
記念撮影の様子

記念撮影の様子（全体）

③隊列編成

記念撮影が終わると、隊列を編成して運行の準備をする。運行もそのままの形でおこなっていくため、鉦班、笛班、太鼓班など、「ねぶた大好き！」活動の班ごとに並んでいくことになる。隊列はロープで幅を決めており、安全確保のため、横に広がり過ぎないような配慮もある。

隊列図　　※ハネトの後ろと、全体の後ろにミニねぶたが入る。



隊列編成時の先頭

太鼓も引っぱります

④運行開始→（学校で休憩）→　運行

運行時は途中の休憩以外は休み無く歩き続ける。児童は自分のタイミングで水分を補給したり、休んだりといった行動をとることになる。運行中は保護者や地域の方々が交通整理を行ってくれる。児童の周りにはロープをもった保護者が立ってくれ、児童の変化への対応や安全の確保をしてくれる。運行のルートの中には、踏み切りを越える場所があり、縦に長い隊列であるねぶた運行では、そこでの安全確保が課題となっている。

学区を八の字のように運行し、中間地点である学校でトイレ休憩をとる。

ハネト（１、２年）

笛を吹く児童

⑤運行終了　→　片付け

学校に到着し、運行が終了すると、保護者や教員、地域の方々が協力してねぶたや太鼓の片付けを行う。児童は参加賞のお菓子を受け取り、保護者とともに帰宅する。

片付けの様子

運行を終了して･･･

５．「ねぶた大好き！」活動に対する意識

〇児童の意識

児童にとって、この「ねぶた大好き！」の活動は、自分の欲求を消化できる場である。児童は自分の希望した班で、自分の能力を高めたり、今ある技術を発揮したりしながら、ねぶた運行に向かって活動に取り組むことができている。６校時開始のチャイムが鳴る前から作業を始めたくて堪らないというような姿が見られたり、ここそこから笛の音が聞こえたりする。地域の伝統行事である“ねぶた”に関わる楽しさ、地域の方々に教えていただくことの楽しさを感じているようだ。

普段からねぶたに関わったり、囃子方に所属したりしている児童はもちろんのこと、「ねぶた大好き！」の活動で初めてねぶたと関わった児童も、本当に前向きに活動に関わっている。ねぶたの制作も囃子の練習も、いわば自分との闘いであるため、逃げ出したり嫌になったりする児童が居そうなものだが、この活動の中で児童が怒られている場面ややる気をなくしている場面に遭遇したことが無い。児童の意識の高さも感じる活動である。

強いて言うならば、児童が主体的に活動しているという場面は少ない。何年もの積み重ねのある活動であるため、児童も流れを理解しており、創造的な活動の少なさを感じる。ねぶたの骨組みを行うことや、下絵を書いてみるなど、創造的な活動をしてみたいと感じている児童もいるかもしれない。

〇保護者・地域の意識

「ねぶた大好き！」活動において、保護者・地域が果たす役割はとても大きいものである。当日の運行のみならず、準備段階である総合的な学習の時間は、保護者や地域の協力なしでは為し得ないものであり、古川地域だからこそ為せる活動であるとも考えられる。しかし、この「ねぶた大好き！」活動と古川地域ねぶたが、保護者と子ども・学校、地域と子ども・学校をつなぐ役割をもっていることも確かである。

その中で、保護者・地域が「ねぶた大好き！」活動に寄せる期待は大きなものであると考えら

れる。それは、毎週の練習に参加する保護者の姿、運行当日に児童とともに歩く保護者の姿、講師を担当している地域の方々の姿、軒先で児童のねぶたが来るのを今か今かと待っている地域の方々の姿によってあらわされている。

〇教師の意識

教員の「ねぶた大好き！」活動へのかかわり方はそれぞれである。児童と同じ立場で囃子の練習をする教員もいれば、積極的に児童に指導している教員もいる。もちろんねぶたが大好きな教員もいれば、ねぶたの活動にあまり興味がないという教員もいる。その中で教員全体が一体となって動くことができているのは、学校行事としての位置づけと、地域とのかかわり、総合的な学習の時間の年間計画の影響が大きいと考えられる。古川小学校の総合的な学習の時間は、「地域とのかかわり」を大きなテーマに挙げている。ねぶた運行だけでなく、後期には地域パレードも計画されており、地域とのかかわりを考えたときに、「ねぶた大好き！」活動が大切な役割を果たしていると感じている教員も多いように思う。

しかし、教員の中に、積極的に児童を指導できる方が少ないことは、教員の意識の中の不安要素でもある。地域の協力を得ており指導に不十分なことはないが、やはり教員の中で、活動に積極的に関わっていける人材が少ないことは、学校行事として運営していく上での障害となることもあるとの意識を持つ教員もいるようだ。

（文責：大野絵美）

第2章　弘前市立北小学校　「ねぷた集会」

１．学校の概要と歴史

北小学校は、弘前市の北部に位置する小学校であり、昭和 50 年代以降、急激に宅地化が進み、同市時敏小学校から分離する形で開校した。岩賀地区、清野袋地区、向外瀬地区、宮園地区、青山地区、神田地区の一部の 6 地区から学区が編成され、農村地域と住宅地域が融合している学区である。学級数は、普通学級 12 組、特別支援学級 2 組の計 14 組である。全校児童数は 372 名（平成 23 年 9 月 12 日現在）。一時は全校児童数 700 名を超える市内有数の大規模校であったが、近年では著しい減少が見られている。

平成以降の新設校ということもあり、「地域の学校」という意識が強く、地域で学校を盛り上げる動きが見られ、教育活動にも協力的である。また、学区内に宮園青山連合ねぷた愛好会、向外瀬ねぷた愛好会の二つの団体を抱え、ねぷたに接する機会の多い地域であると言える。

1991（平成 3）年　4 月　青森県弘前市立時敏小学校から分離し、創立。
弘前市から講師の福間幸悦氏を招き笛の講習会を実施。
8 月　合同運行前のパレードに笛の演奏で参加。
宮園ねぷた愛好会（現宮園青山連合ねぷた愛好会）、向外瀬ねぷた愛好会の両団体に開校を祝し、教職員、児童が参加。

1992（平成 4）年　特活主任の堀内教諭の発案により、ねぷた集会開始。
うちわにねぷた絵を貼り、割ばしでリズムを打ちお囃子をうけて集会を行った。その後、四角いダンボール、段ボールの組み合わせと年々進化し、絵の技術も向上。

1995（平成 7）年　ねぷたクラブ発足（現在は廃止）。ねぷたクラブにより、ベニヤ板と角材で扇ねぷたを作成。

1996（平成 8）年　ベニヤ板の骨組みをやめ、骨組みを作る案が出るも、クレヨンを使うことで低学年も製作に参加できるというベニヤ板の利点から平成 9 年の課題となる（しかし、担当教諭の転勤により白紙に戻る）。

2001（平成 13）年　北小学校 10 周年。教職員と児童で宮園青山連合ねぷた愛好会、向外瀬ねぷた愛好会の両団体の運行に参加（自由参加）。

2008（平成 20）年　北地区コミュニティー会議より、扇ねぷたの骨組みが寄付される。

2011（平成 23）年　7 月　北小学校 20 周年記念ねぷた集会実施。

２．活動領域と内容

〇領域

「ねぷた集会」の準備・練習はおおよそが縦割り班で行われるため、「総合的な学習の時間」（１～２年は生活科）で行われる。北小学校では総合的な学習の時間を独自に「ふれあいタイム」と称している。「ねぷた集会」のための「ふれあいタイム」は準備・練習に８時間、本番２時間の合計 10 時間が用意されている。

「ふれあいタイム」では、主に活動計画の話し合いや練習、中間発表が行われている。「ねぷた集会」で用いる扇ねぷたは３年生が開きのぼたん絵の製作、４年生が肩（側面）の絵や文

字の製作、５年生が袖絵と見送り絵の製作、６年生が鏡絵と額絵の製作、と分担されており、それぞれの製作は「ふれあいタイム」ではなく、学級活動の時間や学年ごとの総合的な学習の時間、もしくは放課後に行われている。

○金魚ねぷた製作

北小学校では「ねぷた集会」の授業の一環として４年生で金魚ねぷたの製作を行っている。金魚ねぷたの製作は「総合的な学習の時間」に行われている。時間数は１日目２時間、２日目１時間の合計３時間であり、２日間連続して実施されている。

金魚ねぷたの製作では、講師として弘前市のねぷた絵師である成田幻節氏を招き、墨書き、ロウ入れ、着色を行っている。金魚ねぷた製作に用いられる用具は、ロウを溶かすホットプレートを除き、全て講師の持参であり、児童が用いる紙はりされた骨組みも全て講師の自作である。製作は１日目の２時間で墨書き、ロウ入れを行い、１日おいて乾燥させ、２日目にしっぽとひれの接着等の仕上げを行う。完成した金魚ねぷたは教室に展示され、「ねぷた集会」終了後、各自持ち帰っている。

製作に際して、児童は積極的に講師に質問をするなどして意欲的にかつどうしている様子が見られた。児童の感想として、「楽しかった」「自分に似た金魚ねぷたができておもしろかった」「また作りたい」等が挙げられる。

金魚ねぷた製作の様子

○笛の講習会

対象学年は 4 年生以上。外部から講師を招き笛の講習を行う。以前は、「総合的な学習の時間」等を利用して行われていたが、現在は生涯教育の一環として授業時間外に行われている。笛の講習会が実施されない年もある。

○ミニ扇ねぷたの製作

「ねぷた集会」では、1 班に 1 台ずつミニ扇ねぷたが配布され、各班で製作を行う。使用される骨組みは、以前はベニヤ板で製作されたものであったが、平成 20 年度に北地区コミュニティー会議より、合同運行で使用されている骨組みに近いものが寄付され、平成 21 年度から使用されている。

製作は、領域の項目に記した通り、担当された学年ごとに行われる。ねぷた絵は過去に発行されたねぷた情報雑誌を参考とするものや、児童が考えたオリジナルのものがある。しかし、ねぷた本来の雰囲気を感じるというような点から、アニメや漫画のキャラクターをねぷた絵に用いることはあまり推奨されていない。

平成 20 年度に北地区コミュニティー会議より寄付された骨組み

〇アピールの準備

「ふれあいタイム」の全校縦割り班活動では、主にアピールの練習が行われている。縦割り班ごとに教室に分かれ、6 年生を中心として練習を行う。アピールの準備は、事前に 6 年生が案や準備物を用意しておき、全校縦割り班の 1 回目の活動で「ねぷた集会」に向けての活動計画を作成する。3 回目の活動が中間発表に設定されているため、「ふれあいタイム」以外にも練習時間を設定している班も多い。

アピールの準備に関して、各班で使える予算は 2000 円以内であり、児童が必要な物品を考え、教師に相談し、教師が準備するという形をとっている。また、教師の関わりとしては、アピールの練習や案に積極的に意見を出す班や、必要な部分にのみ意見を出す班など様々である。

話し合いや練習の様子

３．「ねぷた集会」本番について

「ねぷた集会」は７月の中旬に実施されている。「ねぷた集会」は参観日を兼ねており、体育館で行われる。実施時間はおよそ２時間である。

〇発表（アピール）に関して

発表は１班３分で１班ずつ１２班行われる。発表の順番は各班の代表によるくじ引きにより決められている。発表内容は各班様々であり、ねぷたの歴史や、ねぶた祭りや立佞武多の囃子について調べ発表している。

〇服装に関して

「ねぷた集会」では、児童は半纏や、ゆかた、豆絞りなどを身につけている。半纏は学校指

定のものではなく、各家庭で用意しているため、統一されておらず、色・町名ともに様々な半纏が見られた。また、半纏やゆかた、豆絞りの装着は義務付けられているのではなく、できるだけ身につけるように推奨されている。

〇審査に関して

審査基準は①絵②囃子③かけ声④アイデア⑤運行のチームワークの５つ（平成 23 年度は⑥20 周年アピールの 6 項目で 60 点満点）であり、各 10 点満点、合計 50 点で、全審査員の合計得点で賞を決める。

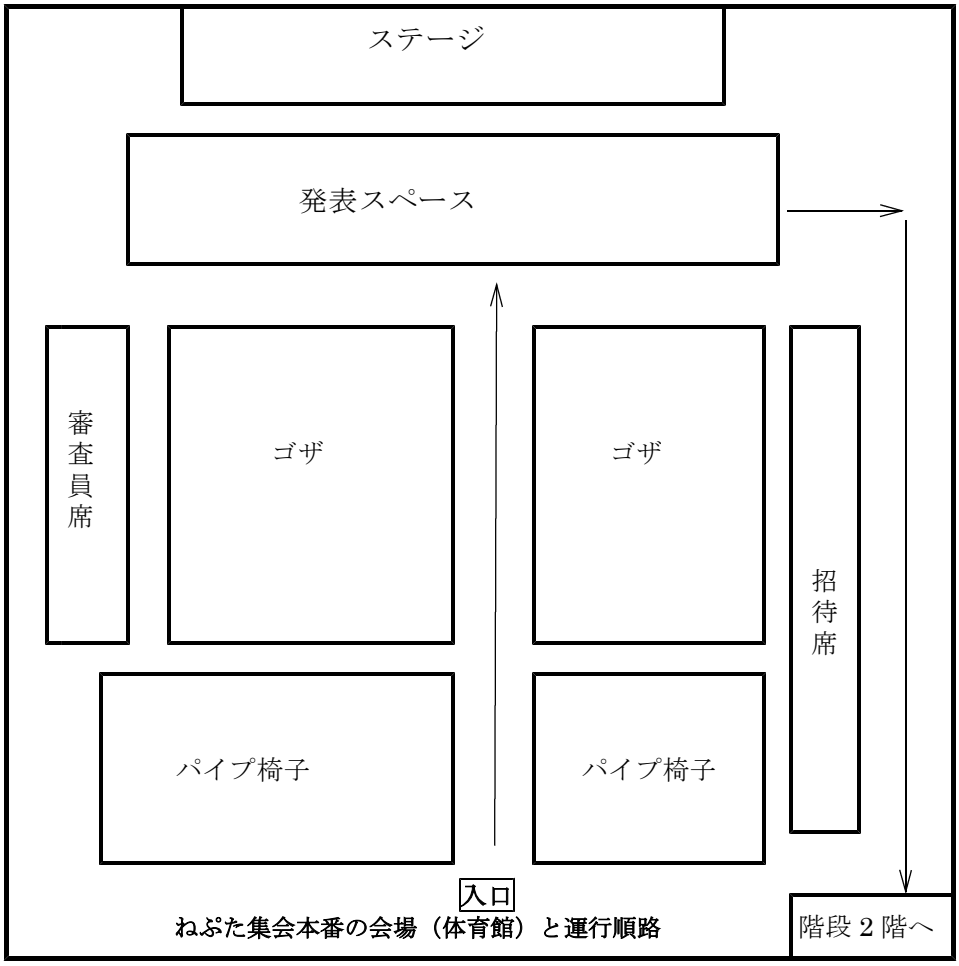
審査員は、校長先生、元校長先生、前校長先生、学校評議員、北地区連合町会長、北地区コミュニティー会議事務局長、北地区子ども会育成会会長、向外瀬ねぷた愛好会会長、宮園・青山連合ねぷた愛好会会長、笛講習会講師の方等である。

賞については、最優秀賞、優秀賞、優良賞の他にアイデア賞やチームワーク賞等を用意し、12 班全てに賞が与えられている。

〇閉会式・表彰

12 班全ての班の発表終了後、保護者の協力のもとパイプ椅子とゴザを両窓側に片付け、全校児童が体育館に入場する。この際保護者は体育館脇もしくはギャラリーでの参観となる。全校児童の入場が完了し次第閉会式を行う。閉会式では校長先生と審査員の方々からの表彰が行われ、その後、全校児童によるねぷた囃子競演を行う。ねぷた囃子競演の際には最優秀賞に選ばれた班がステージに上がり、ステージに設置された大太鼓を使って演奏することができる。競演終了後、校長先生からのお話があり、閉会宣言を行い「ねぷた集会」を終了する。

ねぷた集会本番の様子（上：平成 22 年度、下：平成 23 年度）



ねぷた集会本番の会場（体育館）と運行順路

４．「ねぷた集会」に対する意識

〇子ども（児童）の意識

「ねぷた集会」は、全校縦割り班活動の中心であり、１年生から６年生までが集まって活動をするため、異学年の児童が交流する活動として重要となっている。

児童は、異学年の仲間とふれあうことを楽しみにしている。とくに６年生は、自分が楽しむことはもちろん、縦割り班のリーダーとなってねぷたの運行や発表の内容を決め、下級生のめんどうをみながら班をまとめる行動が要求されるため、最高学年としての意識が高まるとともに、リーダーシップを発揮する場として特別な思いをもっている。

毎年恒例の「全校ねぷた集会」で、自分の班が最優秀賞をとることは子どもたちにとって最高の喜びであり、協力し団結して練習した成果を保護者や地域の方に見てもらうことは子どもたちにとって楽しみであり、喜びになっている。

このような意味で、ねぷた集会は子どもたちの表現する意欲を非常に高め、表現力を育てていると言える。

実際、アピール終了直後の児童の感想からは「楽しくできて良かった」「楽しかった」「頑張ったのでよかった」「優勝したい」といった声が聞こえ、児童が一生懸命に練習に取り組み、優勝を目指しながら楽しんでねぷた集会を行っている様子がうかがえた。

〇保護者・地域の意識

「ねぷた集会」において保護者の関わりは、参観日を兼ねる「ねぷた集会」当日のみである。「ねぷた集会」当日は保護者のみではなく、地域の方や老人介護施設の方等が参観に訪れている。

「ねぷた集会」で使われる骨組みや笛等は北地区コミュニティー会議等地域の方からの寄付が多く、地域の方の「ねぷた集会」に対する意識は高いものと考えられる。また、地域や保護者の方の中には、現在のような体育館での発表形式の「ねぷた集会」ではなく、児童数の多い時期に行われていた校外での運行のような、ねぷた本来の運行に近い「ねぷた集会」の形式を望むという声も聞こえている。

〇教師の意識

学習指導要領の改訂に伴う総合的な学習の時間の取り扱いの減少や、7 月という実施時期の問題等から「ねぷた集会」での教師の負担は大きく、「廃止すべき」との声も一部では挙がっている。実施時期の問題については、7 月は 1 学期末であるため通信簿等との作業が並行し負担が大きいということであったが、2011（平成 22）年度より、同校は前期後期制を導入したため、通信簿等と関連する負担は和らいだとの声が聞こえた。

近年、同校の総合的な学習の時間では、「ねぷた集会」の準備と並行し外国語活動の学習も行われている。そのため「ねぷた集会」に関する作業の時間が減り、その分を学級活動の時間や他の教科の時間で補うため、その点でも教師の負担が増えていると考えられる。

「ねぷた集会」を「廃止すべき」という声が聞こえる一方では、「校外での運行に戻したい」という声も聞こえた。しかし、校外での運行に戻すには、交通整理や時間数等の問題があり、実現は厳しいものと考えられている。

（文責：鎌田沙穂）

第3章　青森市立北中学校　「ねぶた運行」

1. 歴史

1985（昭和 60）年　4 月　奥内中学校と後潟中学校が統合し北中学校として創立。
1999（平成 11）年　6 月　ねぶた笛講集会を実施。
2000（平成 12）年　6 月　ねぶた制作説明会を開いた。当時の校長（山崎智子先生）により
ねぶた制作の立案。
8 月　徳誠園（障害者支援施設）と合同で地域でのねぶた運行参加。
その後伝統行事として、毎年合同運行に参加している。

2. 活動領域と内容

〇領域

青森市立北中学校では、現在ではねぶた制作はほとんど行なわれていなく、昔に制作したねぶたを毎年、生徒会が修理を行なっている。修理にかかる時間として、特には設けていなく修理が必要な時だけ修理を行なっている。昨年の修理日数は１日である。

ねぶた笛講習会は、合同運行にむけて平成 11 年から毎年開かれている。ねぶた笛講習会は、総合的な活動の時間を利用し週一回、全学年で練習を行なっている。昨年の練習時間は、「総合的な学習の時間」（45 分）を計５回使用し練習が行なわれた。

合同運行では、毎年８月８日に行なわれ、全学年ほとんどが笛、一人が太鼓を担当している。午後６時に運行が始まり、学校周辺の町内会を回り、７時には後潟漁港に到着する。

〇ねぶたの制作

北中学校では、平成12年に地域のねぶた師の方にねぶたの骨組みの依頼をし、残りの制作は生徒が行なっていた。ほとんどの生徒が紙はりを担当し、一部の生徒が色づけを行ない、完成まで進めた。当時は保護者の協力もあった。その後は、毎年定期的に修理や補修作業をして、運行に向けて準備をしている。修理は、生徒会のメンバーが上の学年が下の学年へと指導にあたり、修理は主につぎはぎで穴の空いた部分や破れた部分などを補修している。作業時間は、夏休みや「総合的な学習の時間」を利用し１日や２日で補修が終わる。

修理・補修時の生徒の反応としては、非常に楽しそうであった。今では修理だけでなく、一から作ってみたいという意見もあった。

北中学校　ねぶた本体

○ねぶた笛講習会

「総合的な学習の時間」（４５分間）の一週間に一度体育館に集まり、全学年がねぶたの笛の練習を行なう。３年生の中で笛の吹ける生徒（約８人程度）が指導にあたる。

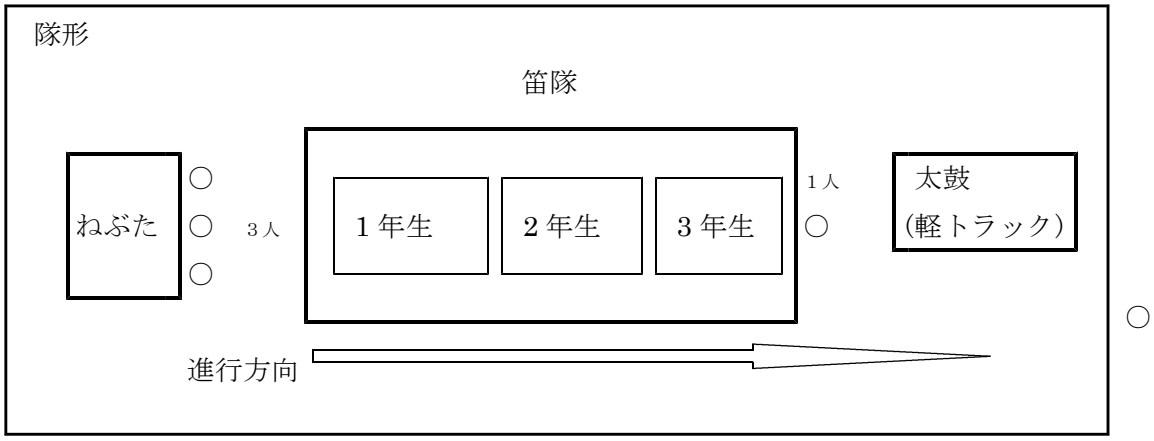
○合同運行

ねぶた合同運行は、北中学校と徳誠園（障害者支援施設）と子供会（北・南後潟子供会）が合同で、各ねぶた１台ずつ、計３台が出陣する。徳誠園により「第37回 ねぶた運行・盆踊り祭り」と題しイベントが主催される。始めに、ねぶた運行が行なわれ、午後６時に四戸橋（運行開始地点）から出発し、町内を練り歩く、そして７時15分頃に後潟漁港（集合地点）に到着する、おおよそ１時間程度運行が行なわれる。到着後は、ねぶた３台が並べられ、盆踊りが始まる。生徒はそこで解散になる。

＜北中学校のねぶた運行の流れ＞

北中学校のねぶたは、始めに開始地点まで、ねぶたを運ぶ*。その後、生徒が集まり、引き手が３人、太鼓が１人、残りの生徒全員が笛を担当する。先頭が太鼓で、３年生の１人が太鼓を叩く。次に、笛隊が各学年ずつまとまり先頭の３年生から順に２年生、１年生へと続く。最後尾にねぶたが付き、引き手は３人で、１・２・３年生が一緒にねぶたを引く。

ねぶたを運ぶには、保護者の会である「オヤジの会」が運ぶのを手伝っている。



合同運行の様子

３．「北中学校ねぶた」に対する意識

○教師の意識

ねぶた制作にあたっては、以前はねぶたに詳しい先生がいたが、転勤で居なくなり、今では、誰も修理・補修が本格的にできない状態にある。そのため、つぎはぎ状態にあるのは、心苦しい部分がある。新たなねぶたを制作するためには、時間がないのが現状であり、「学校側はねぶたが本職でないので、伝統を受け継ぐことも負担であるし、その上時間もなく、とてつもなく負担」であるとの意見。そのため、今後は囃子だけでの合同運行参加も考えている。

生徒がねぶたに関わることについて、「地域の文化とふれ合いをもつことはとてもいいことだと思う、地域と関わることで伝統文化を受け継いでいかねばという心が育つ」とのこと。

囃子の講習会では、「太鼓や笛の練習などに一生懸命取り組む姿勢が素敵、たしかに苦手な子もいるが、教え合う姿がいい」という意見であった。

（文責：山内勇輝）

第4章　弘前市立津軽中学校　「ねぷた運行」

１．歴史

〇ねぷた運行の変遷

津軽中学校のねぷた運行は歴史が長く、その始まりについては現在詳細を知る手がかりがない。昭和 50 年代、（当時岩木町立津軽中学校 50 周年）ねぷた運行は既に行われていた。当時は駒越のねぷた会からねぷたをもらい下げていたが、交渉や管理・保管など教師の負担が大きかったためねぷた運行が途絶えた時期もあった。子ども会活動に熱心であった一教員の意志で昭和 63 年にはねぷた運行は再開していたが、それも何らかの問題からか途絶えることとなる。しかし、平成 16 年に生徒会の担当教員の熱い要望で、文化祭でのねぷた運行を再開。現在まで続いている。

〇　復活に関して

津軽地区では地域の夏祭りでねぷた運行を行っているが、あまりねぷたが盛んではない。中学生くらいの、力のある子に地区の活動をさせたいという地域の人々の思いと、教職員の要望により、津軽中学校によるねぷた運行の復活が決定した。その後は、毎年教職員と 3 年生の要望により行われている。PTA、後援会には 6 年間支援してもらっている。

２．活動領域と内容

〇　領域

文化祭での運行となり、実際の運行に用いるねぷたは地域のねぷた会から借りたものであるため、運行のためのねぷたの制作は行っていない。ねぷた運行に関していうと、当日ねぷたを牽くのみであるため、準備期間はなしである。

しかし、津軽中学校では、大きな扇ねぷたを牽く他に、生徒が作る燈籠も牽いて歩く。その燈籠の制作については総合学習の時間をあてている。文化祭の準備全体では 20 時間。そのうちリハーサルに 1 時間。全 20 時間中、燈籠の制作には 10 時間とってあるが、実際は間に合わないため、放課後や夏休みを利用して制作をする。

〇　燈籠制作

燈籠制作については、各クラスが一台、制作する。平成 17 年までは燈籠制作、その後平成 21 年度までは各学年で一台、担ぎねぷたを制作していたが、現在はまた各クラス一台の燈籠制作に戻っている。各クラス一台だが、クラス全員で制作するわけではない。ちぎり絵、クラスステージ、学級旗、燈籠と担当がわかれており、燈籠の担当になった生徒数名が協力して作り上げる。

燈籠は木で作られた枠組みに合わせて 4 面の和紙を用意し、ねぷた絵や自分のクラス、「津中祭」という文化祭のタイトル、文化祭のテーマ、目標などを描く。和紙には鉛筆で下書きし、墨書き、ロウ入れ、着色を行い、枠への貼り付けも生徒が行う。燈籠の制作に用いるものは全て学校の備品である。ねぷたの鏡絵や見送り絵などは、雑誌を参考に書き写したり、OHP を用いて写したりするのが主な方法である。燈籠制作の概要説明や簡単な手順はクラス担任が指導するが、下書き、墨書き、ロウ入れ、着色に関しては指導する担当教員や講師はおらず、全

て生徒主体で行う。全学年の燈籠グループが図工室で活動するため、下級生は先輩が制作したものや先輩の活動の姿を参考に行っている。

作業は文化祭前の総合学習の時間を使って行うが､間に合わない場合はグループで話し合い、夏休み中の決められた日程で補い作成する。

着色に関して、以前は美術担当の教員が、ねぷた絵に用いる顔料の調合や、着色の指導などを率先して行っていた。現在はその美術担当教員が転勤してしまい、指導できる教員がいないため専用の顔料ではなく、ポスターカラー（絵の具）で着色している。

燈籠制作の様子

○ **囃子に関して**

囃子は募集制。主に地域でねぷたに参加している子が多い。ねぷた囃子、登山囃子の出前講座を行っているが、出前講座の参加者に囃子の強制はしていない。

○　クラスＴシャツの制作

主に３年生が制作する。3 年間の思い出と、その集大成として、各クラスがＴシャツを制作し、ねぷた運行の際に着用する。各クラス個性があり、Ｔシャツのデザインを考え、企業に頼んで作ってもらったり、自らペンキで絵を描いたりとその制作方法は様々である。

クラスＴシャツ

３．ねぷた運行本番について

ねぷた運行は津中祭の前夜祭で行われ、明日から津軽中学校の文化祭が始まるという宣伝を兼ねて行っている。津軽中学校のねぷた運行は地域に根付いており、この時期になると地域の住民もそれを楽しみに過ごしている。ねぷた運行本番では、沿道に多くの住人が集まり、中学生の元気なかけ声と美しいねぷたを楽しんでいる。

○使用するねぷたに関して

ねぷた運行で牽くねぷたは、地域のねぷた会から借りている。以前までは為信会の大きなものと、まつり組の小さなものを 2 台借りていたが、現在はまつり組のもののみ借りて運行を行っている。

○運行時の天候に関して

大雨中止ということになっており、小雨で決行したこともあったが、中止にした方が良かったのではと言う反省もあった。

○地域の参加形態に関して

ねぷた運行の際、PTA 交通整理員という役職で、PTA の方々には交通整理の協力をいただいており、交通整理には PTA の他、警察と交通警備隊にも協力をいただいている。生徒の親は沿道で見ているというのがほとんどである。

軽
中

今刻む僕
らの時間

○ねぷた運行のルート

４．「ねぷた運行」に対する意識

○子ども（生徒）の意識

ねぷた運行は、年に一度の文化祭初日に行われる。前夜祭のメインイベントとしての色が強い。もちろん文化祭が始まることの宣伝でもあるが、多くの生徒は文化祭の思い出として、この活動を重要視している。特に３年生は受験と卒業を目前に控えているため、中学校生活の思い出を刻むといった強い想いを抱いてこの活動に参加している。また、文化祭は生徒会が主体となって行うため、生徒会の役員となっている生徒も、ねぷた運行を成功させようと真剣に取り組んでいる。揃いの T シャツを身に付け、声を張り上げながらねぷたを牽くことで、生徒間の団結力が高まっていく。

ねぷた運行は生徒の、これから始まる文化祭への意気込みとモチベーションを高める機会になっていると言える。

実際にねぷたを牽いて地域を練り歩く様は溌溂としており、元気に掛け声をあげる姿からは頑張ろう、楽しもうという意思が伝わってくる。

○保護者・地域の意識

保護者は制作や実際の運行には関わっていない。PTA 役員となっている保護者はねぷた運行の際に交通整理を行うが、PTA 役員でない保護者は沿道で生徒の活動を参観し、応援している。交通整理に関しては地域の警察と交通警備隊の協力も受けている。

ねぷた運行では地域のねぷた会から借りたねぷたを運行する。ねぷたの運搬、掛け声指導や交通整理はねぷた会に所属している地域の住人からも支援がある。

津軽中学校のある旧岩木町地区でねぷたが見られるのは、７月末に開催される夏祭りと、津

軽中学校の文化祭におけるねぷた運行のみである。そのため、地域住民は子ども達の勇姿と、地域の夜空を彩るねぷたが見られることに期待し、楽しみに待っている。文化祭の時期が近づくと地域住民は「そろそろ津軽中学校のねぷただね」と言い合う。文化祭でのねぷた運行が地域に根付いていると言える。

〇教師の意識

かつて何らかの問題で途絶えていたねぷた運行だが、ねぷたを見られるのが地域の夏祭りのみという状況はあまりにも寂しいと教師自体考えている。地域の夏祭りばかりではなく、ねぷたをもっと盛んにしたいという想い、また、子ども達の「運行したい」という希望に応えてやりたいという想いがある。しかし、交通規制を行なったり、PTA・警察・ねぷた会との連絡・連携など、おおがかりで教師への負担が多いことから、何度か廃止も検討された。「廃止すべき」なのか、しかし「続けていきたい」という葛藤に置かれているのが現状である。

（文責：清藤範子）